様式　1

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	児玉　大志
論文担当者	主　査　　大島　健司
	副　査　　石原　正治
	副　査　　新村　健
学位論文名	Efficacy of Percutaneous Direct Puncture Biopsy of Malignant Lung Tumors Contacting to the Pleura （胸膜に接する肺悪性腫瘍に対する経皮的直接穿刺生検の有用性に関する検討）

論文審査の結果の要旨

末梢肺結節に対するCTガイド下経皮的肺生検は、正診率が高く安全な手技であるが、頻度の高い合併症として気胸が挙げられ、胸腔ドレナージを要する気胸は約7%に発生すると報告されている。腫瘍を経肺的に穿刺する経肺穿刺が気胸合併の危険因子の一つであり、肺を経ずに腫瘍を直接穿刺することで気胸合併率を抑えられる可能性がある。一方で、腫瘍の直接穿刺は腫瘍の胸膜播種の危険性を高める可能性があり、経肺穿刺と直接穿刺のどちらが適切な方法か明確ではない。そこで、本研究では、胸膜に接する肺悪性腫瘍に対して直接穿刺が有用であるかを後方視的に検討した。

対象は兵庫医科大学病院でCTガイド下経皮的肺生検を施行し、悪性腫瘍と判定された163例を対象とした。内訳は直接穿刺群80例（49.1%）、経肺穿刺群83例（50.9%）であった。正診率は、直接穿刺群で93.8%（75/80）、経肺穿刺群で98.8%（82/83）で、両群間に有意差は認められなかった（p ＝0.11）。胸腔ドレナージを要する気胸は、直接穿刺群では見られず、経肺穿刺群でのみ13.8%（13/83）に認められた（p ＜0.001）。腫瘍径や腫瘍の胸膜接触長、穿刺回数などを含めた多変量解析で、胸腔ドレナージを要する気胸の発生に関して、経肺穿刺が唯一の危険因子であった(p ＝0.004)。胸膜播種や血胸の発生頻度に両群間で有意差は認められなかった。

本研究において、CTガイド下経皮的肺生検後の胸腔ドレナージを要する気胸の発生頻度は過去の報告と同様の頻度であったが、直接穿刺による気胸の発生はなく、合併症予防に直接穿刺が有用と考えられた。以上より本研究は、CTガイド下経皮的肺生検における悪性腫瘍穿刺法の選択に寄与する臨床的意義が高い研究であり、学位論文に値すると判断した。